

続・鉄道を活かしたまちづくりと観光

～黒部には 夢の列車 愛の列車 未来列車が走る～

(2018. 11. 17 土 14:00～16:00 於 黒部市役所 202・203会議室 参加者 50名)

黒部ワンコイン・プロジェクト実行委員会

■菅野実行委員長 開会挨拶(概要)■

- (1)2009年にも中川先生に講演会をやっていただき、まちづくりに地域交通が大事であるということを理解してやってきた。先生のアイデアをいただきながら、まずはくろワンを通年で土日祝日開催ができるように頑張っていきたい。
- (2)黒部は全国トップクラスの駅数(23旅客駅あり、人口1万あたりの駅数が5.68駅)ということであったが、活かしていかなければいけないし、この事実をあまり市民の人が知らないし、ロコミで広げてほしい。
- (3)くろワンは公共交通で歩いて暮らせるまちづくりを目指している。鉄道は、市の発展に寄与してきた貴重な財産であり、残していかなければいけないし、私たちも年をとると運転ができなくなり公共交通が必要となる。
- (4)車社会でまちをゆっくりと楽しみながら歩かなくなり、商店街の衰退に繋がった。しかし、黒部市でも「くろべ食堂」「やってみっか市」「クロベストリートマーケット」で楽しい雰囲気賑わっており、やり方次第で賑わいが復活すると思っている。
- (5)人々の発想が変わっていくのに20年かかると先生がおっしゃっていた。くろワンもまだ10年程度。今から10年後、黒部のまちに素晴らしい変化があるよう、黒部のまちに賑わいを創っていくようではありませんか。

■中川先生講演会(概要)■

1. 黒部で「賑わい」を創出するには

- (1)黒部は鉄道が発達してきたことによってまちが支えられてきた。先人の苦労によって作られた鉄道を、黒部の皆さんで守ってきた。黒部は他のまちと比べて、鉄道があることでまちの活力を維持し続けてきた。三日市がこれまで中心的なまちとして栄え、支えられてきたのは鉄道があるからである。
- (2)ヨーロッパなどのまちでは、どこのまちも賑わっていて“当たり前”という社会になった。まちづくりの発想は世界的にこの20年間で変わってきたが、日本では変わっていない。日本では人口数十万人の都市でさえ田舎町という考え方もあるが、ヨーロッパでは小さい地方都市でも賑わっている(ゼーフェルト 3000人、ラッテンベルグ 400人、キッシュビュール 8400人、バードイーシェル 14100人などいずれもオーストリア)。「富山は寒い。雨が降る。」のでまちが賑わうことはないという人もいるが、それはただの言い訳。ヨーロッパに比べると、富山はむしろ寒くない。降水量は日本の方が多いが、ヨーロッパも雨の日は多い。日照時間もほとんど変わらない。
- (3)賑わいまちづくりの基本政策“まちなか3点セット”(=賑わっている都市の都市政策セオリー)
 - ①まちなかに安全で快適な歩行者空間が確保されている。
 - ②その歩行者空間への便利でわかりやすい公共交通の充実。
 - ③駐車場は歩行者空間の外側に設置し、歩行者空間へは歩いてきてもらう。これを基本として、まちなかの景観デザイン、食の魅力・名産品、イベント開催を連携させる。このセオリー3点セットを無視したまま、イベント等で勝負しようとしても定着した賑わいにはつながらない。
- (4)安全な歩行者空間を確保し、歩いて「楽しいか」「魅力的かどうか」で、そこが賑わうかどうかが決まる。駐車場があるからと言って賑わうものではない。ラッテンベルグ(人口400人:オーストリア)で賑わっていることから宇奈月温泉街も十分賑わう要素がある。三日市ではクロベストリートマーケット(10月13日開催)でまちなかが賑わっており、黒部でも実証済み。黒部市がコンパクトシティとして国から選定されており、まちの賑わいづくりを進めていくことが重要である。

2. 「歩行者空間の確保と賑わいづくり」が世界の常識

- (1)1970年頃から「これからは自動車の時代」として道路を整備し、自動車による便利で豊かな生活となった。一戸建ての家が建ち郊外に広がった。一方市街地が低密度となり、都心の中心性が薄くなり、店やその客もバイパスへ移り、ロードサイドではどこにでもある店があり、まちなかの魅力・独特の魅力が失われた。
- (2)市街地拡散により、上下水道など公共サービス提供の効率が低下し、コストが増大した。今と1970年と比べると、人口は1.2倍になったが、市街地(DID)面積は2倍となり、低密度な市街地になっている。人口減少都市の実に87.2%が市街地面積が増加している。その結果、「①自動車がないと暮らせないまち」「②行政コストが大きく、環境負荷が大きいまち」「③賑わいと活力に欠けるまち」になっていった。
- (3)都市と交通の3つの悪循環
 - ①公共交通の悪循環
自動車が多くなり公共交通の客が減少→便数を減らす→値上げ・便数の減少。そして自動車への依存が拡大。
 - ②都市構造の悪循環
自動車の普及により都市構造に新たな循環が発生→人々が広い範囲に住むことができるようになり、公共交通の成立

が困難になる→公共交通に頼りたくても自動車で生活するしか選択肢はなくなる。

③まちなかの悪循環

まちなかでも空き家を解体し、駐車場化が進み、まちなかの魅力が低下→店・病院・市役所などが駐車場が確保できる郊外へ移る→さらにまちなかの魅力がなくなり一段と郊外化が進んでいく。

- (4) 日本では自由に宅地開発が進んできたので、まちなかへの人口誘導施策しか残されていない。鉄道やバスを便利にして、まちなかに住むことができるような環境にし、多くの人がそういう行動をとってもらえるようにまちの構造を変えていく必要がある。まちなかを人が楽しめるような空間に変えていこうという発想に転換させ、都市を再構築していく必要がある。
- (5) 黒部はまちなかに病院や市役所が立地して、まちの賑わいを創出できる可能性があり、都市構造が鉄道を中心にコンパクトになっていることから、今回コンパクトシティモデル都市に認定された。バス交通は都市の中心線が作りにくい交通モードである一方で、鉄道は街の骨格となりやすい交通モードであり、黒部は都市構造を再構築できる環境である。
- (6) まちなかの歩行者空間の設定にあたって、ヨーロッパにおいても「自動車がまちなかに入るとなくなるとまちが寂れていくのではないかと心配の声があったが、2000年代に入り発想が変わった。車社会のアメリカでさえも、ブロードウェイ・タイムズスクエアは歩行者空間へと変わった。まちなかの歩行者空間は今や世界の常識になったが、日本人だけが発想が変わらないのは残念。

3. 鉄道とまちづくり

- (1) まず鉄道を便利にしないと人は乗ってくれない。「鶏が先か卵が先か」と揶揄する人もいるが、公共交通の場合、「鉄道を便利にする方が先」であり、便利にして、街が活性化し、また増便で便利にするという発想に変わっていく必要がある。
- (2) 駅の周りに“まちを育てる”ことが重要。高齢化の進展により自動車がなくても暮らせることが必要となり、駅の近くに住んで病院や買い物に行けるなど、病院・学校・市役所・郵便局等を駅の徒歩圏内に配置することが求められる。都市政策としての公共施設配置等の都市計画とリンクさせ、悪循環を好循環へと便利で使える鉄道システムへとシフトさせていくことが必須である。

4. 「歩行者空間の確保と賑わいづくり」が都市の活力となる

- (1) 「都市の賑わい」とは多くの人が集まり、楽しく歩いている状況を「賑わっている」という。ただ単に空間を自動車で埋め尽くしている状況は「賑わっている」とは言えない。京都では車線を減らして歩行者空間を確保し過去最高の賑わいにつながった。よくある道路では端に白線が引いてあり、歩行者は自動車に注意しながら専ら白線の外側を慎重に歩くしかなく、商店街がいくら頑張っても賑わうことはない。
- (2) 地方の中小都市では、まちなかが駐車場で侵食されている様がよくみられる。お客さんに来てもらうために駐車場を作り出した結果、虫食い状にまちを壊していった。今では、駐車場はまちなかの外側に置き、まちなかを歩行者空間に変えていくことでお客さんに戻って来てもらうという発想が当たり前。地方の中小都市でまちなかの賑わいづくりの共通したセオリーとして確定した“まちなか3点セット”が重要である。
- (3) 黒部市での“セオリー3点セット”のチェック。
 - ① 歩行者空間：やり方次第により十分創っていきける可能性がある。既に「くろべ食堂」「クラフト市」などが実施されており今後の展開が期待できる。
 - ② 公共交通：地铁など鉄道基盤が整備されており、ダイヤやくろワンなどを改善し、便利にしていけば可能性がある。
 - ③ まちの外側への駐車場配置：まちなかではなくて、まちの周辺部に整備する。例えば、三日市のまちなかに行くのに黒部市役所駐車場に自動車を停めて歩いていくなどが考えられる。
- (4) 「電鉄黒部駅」「市役所跡地周辺市街地」「宇奈月温泉市街地」が賑わう可能性は十分ある。生地・石田も歩行者を優先にすることで魅力的なまちになる可能性があり、観光客の回遊も期待できる。「地鉄宇奈月温泉駅から黒鉄宇奈月駅までのストリート」は観光客が来ているにもかかわらず安全で快適な歩行者空間になっていない。「賑わいづくり」をあまり意識されていない。ここが楽しい空間であれば、トロッコ待ちの人や温泉宿の客以外にもまちなかに出てきてくれる可能性がある。
- (5) 近年歩行者空間が世界で増えてきた技術的な理由として「ライジングボラード(=許可された人がリモコンなどで自由に上下できる車止め)」の技術の確立が挙げられる。これにより住民の合意形成がはかれた。

5. 黒部の鉄道を活かしながら「まちなかの賑わいづくり」への期待

- (1) 黒部のように、こんなに鉄道に恵まれた都市はない。これを活かしていかない手はない。コンパクトシティとして、貴重な財産としての鉄道を地域のために活かすという発想への転換、まちなかの歩行者空間の確保と賑わいづくりに活かしていく黒部の都市政策を期待している。

■菅野実行委員長 閉会挨拶(概要)■

先生の話で黒部はまだ賑わう可能性があることが分かった。行政や鉄道事業者だけではなくて、我々市民が一生懸命取り組まなければいけない。賑わいづくりの話を盛り上げながら黒部をよくしたいと思っている。世の中の常識は非常識みたいなどころがあり、固定概念として頭にあるが、交通政策も日々進化している。今までと違ったことをやれば黒部はもっと良くなると思うので、力を貸してほしい。来年もくろワンをやるので、ぜひ電車に乗ってもらい、公共交通の便利さをPRしていただきたい。本日はありがとうございました。